

東側のものは東から細く入ってすぐに北に向きを変えた後、再び東に向かった後で北に向かい、最頂部でさらに東に下がっており、西側のものは西から入ってそのまま等高線沿いに北に上がっている。

3軒の住居跡が傾斜にはほぼ平行に並んでおり、その上下に、つまり住居の下（低い方）と上（高い方）の両方に道があることになる。東側の道は、最頂部で東と西の2つの方向から上がって来た合流地点、別な言い方をすれば東と西に下りようとする別れ道のような性格を持つところとも考えられる。

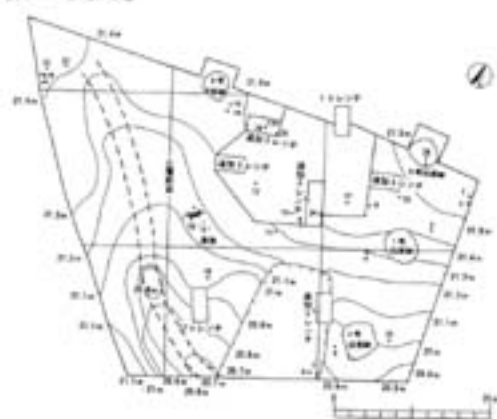
東側の道は、幅60cm～24m、傾斜角は4.2～7.1°であり、西側の道は幅90cm～42m、傾斜角はコンターラインがなく測定不能であるが、図面上からは東側のものよりは緩やかであると推定される。

(7) その他の道跡の所在が推定される道跡

① 二本木道跡（枕崎市鹿籠）

3軒の住居跡がほぼ南北に並んで検出されているが、その西側にU字状に入り込んだコンターラインが見られることから、ここが道跡ではないかと推定した¹⁵⁾。この部分には遺構が全く見られず、傾斜も緩やかであるため、道跡の可能性が高いと判断されるのである。

図上での計測によると、幅は2.4～5.7m、傾斜角は1.6～3.4°となる。



第6図 二本木道跡検出の推定道跡

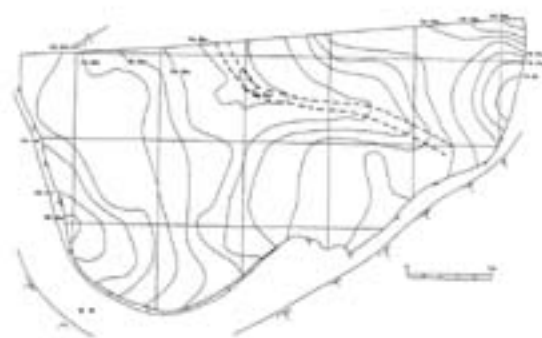
② 加治屋園道跡（鹿児島市川上）

報告書中の「先土器時代の地形図」によると、調査区の西側に、東へ向かった後北へ緩やかに上がって来るようなU字状のコンターラインの流れがあり、これを道跡と推定した¹⁶⁾。この部分には遺構が全く見られず、傾斜も緩やかであるため、道跡の可能性が高いと判断されるのである。

図上の計測では、幅は0.8～1.2m、傾斜角は1.5～3.5°となる。二本木道跡のものとはほとんど変わりがないと言えるかもしれない。

③ 樽ノ原道跡（加世田市村原）

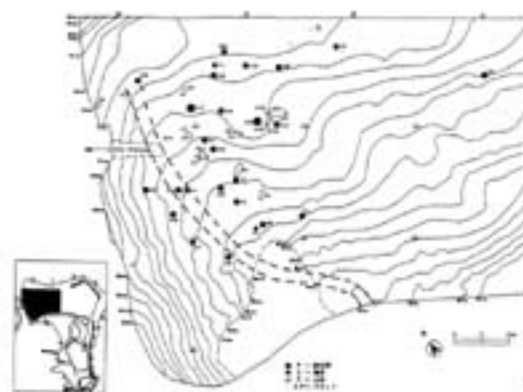
報告書中の「縄文草創期調査区域地形図及び遺構配置図」によると、調査区の南側の中央部にU字状のコンターライ



第7図 加治屋園道跡検出の推定道跡

ンが見え、それが北西に緩やかな傾斜をもって向かっているようであり、これを道跡と推定した¹⁷⁾。

幅は40cm～28m、傾斜角は5.0°と計測される。この部分には集石や土坑などの遺構は見られないことから、道跡の可能性は大きいと考えられる。



第8図 樽ノ原道跡検出の推定道跡

4 道の民族例

ここで、集落内には道があるという事実と道が集落の内外でどのような在り方をしているかを、民族例で見てみることにしたい。道跡の中で道跡がどのように検出されるかのヒントが隠されていると考えられるからである。

まず、先日（9月28日午後10時20分～11時）NHKで放送された「地球に乾杯「巨石を上げて名を残せ」—ミヤンマー 山の民と謎の儀式—」によって見てみたい¹⁸⁾。ここでは、4種類の道が出て来る。つまり、幅3～5m程と見られる集落の中心部を貫く大きな道と、主に集落の中で住居間を結ぶように、また、大きな道から小さな道に分かれる道として幅1～2m程度の中位の道、一人が通る程度の幅50cm～1m程の小さな道、それに、人の足がようやくかかるくらいの幅30～50cm程の細い道—の4種類の道である。実際にはもっと規模の異なる道があると思われるが、この4種類の道が一般的なものと考えられる。それはこれら4種類の道が、地形を考慮した一般的な道の在り方だと考えられるものだからである。つまり、道は地形に制約を受けて、自然発生的に生じるものであることを、この番組